

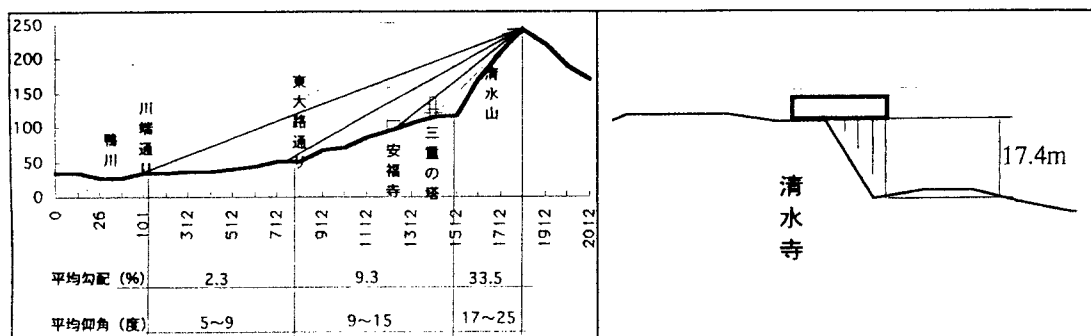
立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之
○立命館大学理工学部 学生会員 松尾 繁

1.はじめに

本研究では、京都世界文化遺産である清水寺周辺をケーススタディ地域に選び、清水寺の占地と眺望、三重の塔や清水山の仰角、清水寺門前町の街路網や地割りの特徴などから、地形構造を解明した。

2.清水寺の占地

昭和 61 測量 1/2500 地図を基本データとして、宅地造成ソフト LAPLAS を用いて、鴨川から清水山の断面図と清水の舞台の断面図を作成した。その結果、山麓の傾斜変換点の南側に張り出したテラスに清水寺が立地していることがわかる。

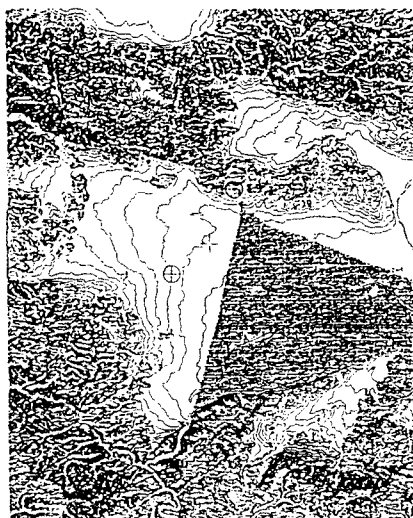
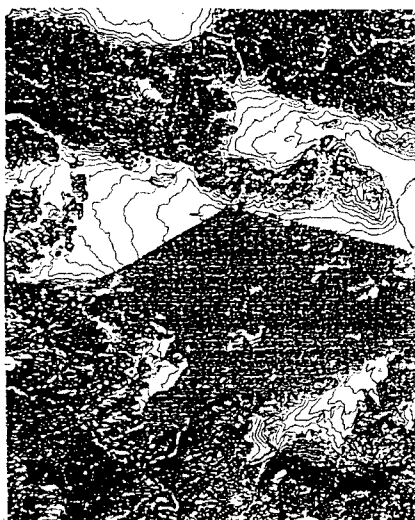


図一1 鴨川から清水山の断面図と仰角

図一2 清水の舞台の横断面図

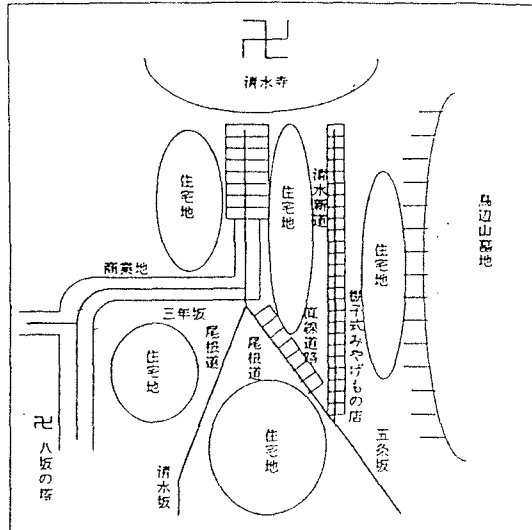
3.清水寺、清水山の眺望

数値地図 50m メッシュを基本データとして地形解析ソフト TIN を用いて、視覚障害物がなかった場合の地上からの三重の塔、清水の舞台の可視領域図を作成した。舞台は、南側に張り出した懸崖造りになっており、清水の舞台の可視領域図を見れば、水平角 85° の範囲で五条通りより南側を見ていたことになる。三重の塔の三段目以上は、水平角 140° の範囲で京都の広い地域から見える。三重の塔は、平安京の中心であった内裏跡や旧下京の中心地の四条室町交差点は地形上は見えるが、市街化が進んだ左京からは見えない。また、鴨川から以東の清水山、清水門前町から、三重の塔、清水山の仰角を見ると、仰角は $4^{\circ} \sim 15^{\circ}$ の範囲におさまっている。川端通りからの仰角は、ともに 5° 付近であり、清水山のスカイラインが視覚的に卓越しており、平遠の景として良く見える。清水寺に近づくにつれ仰角は高くなり、東大路通りから清水寺前の真福寺までの間は、 $9^{\circ} \sim 15^{\circ}$ におさまっていて、最も眺望しやすい仰角の範囲であるが、実際には構造物が立ち並んでいるので、山や塔は見え隠れする。三重の塔から清水山の仰角は 17° となり山容を見越すことはできるけれども、山を見るというよりは、山の存在が印象的となる。



4. 清水門前町の形態

現在の清水寺門前町の都市形態を模式化すると、清水寺は門や階段で、鳥辺山墓地は急な崖により、門前町の市街地と空間的に区切られる。参道沿いには、みやげもの店が多い。尾根道であり旧参道である清水坂の清水寺付近は、短冊状の細長い敷地割りのみやげもの店が並んでいる。谷筋に設けられた直線道路である清水新道沿いは、間口の狭いみやげもの店が立ち並ぶ。清水新道の裏通りと鳥辺山墓地の境界である崖の間は、区画の広い住宅地が崖を背にして存在する。清水坂と清水新道の間は、尾根と谷を区切る斜面になっており、区画の不均等な住宅地となっている。二つの尾根道の清水坂・五条坂に囲まれた地域では、傾斜が緩やかであり、大型の駐車場や公共施設といった広い区画が目立つ。三年坂より八坂の塔に向かう道は、美観地区に指定されており、区画は不均等であるが、ファサードの統一された店が並んでいる。また、裏通には、崖により区切られ、小学校などの生活空間が存在している。このように清水門前町では、地形的要因である参道、急な崖や傾斜により区切られ、それぞれ異なった敷地割りの特徴を持った地域が、モザイク状に組み合わさっており、景観のバリエーションを生んでいる。



5. おわりに

本研究によって清水寺のマクロな地形占地と眺望の特色、ミクロな地形を活用した参道と敷地割りが、奥行きと多様性を持った魅力的な空間を構成していることがわかった。今後は、山麓部のアメニティを向上させるためのアースデザインの具体的な指標の解明が必要である。

＜参考文献＞ 1)樋口 忠彦 (1975) 「景観の構造」 技報堂出版